



『蒲團』について

蒲團のヒロイン 横山よし子

新小説を開いて目録を見ました時の嬉れしさ！否、自分の事を書かれてるなどと、如何して神ならぬ身の夢更知らう筈がありません、私の嬉れしく感じたのは、兼て私の崇拜して居る花袋先生の御名を、其巻頭に見ましたからで、口繪もなにも急いでめぐる其間にも、『蒲團』など、奇抜な題目で、一體何をよ書き遊ばしたのだらう？と、可哀相にまだ其様な事を考へたものです。併し二頁三頁ならずして、私はハツとしました。段々讀み行くに従つて、愈々酷くなつて來ますので、私とても蒲若い女の身空です、恥かしい味氣無い思ひは胸一杯に込上げて嫌な嫌な嫌な氣持ちに泣きました。其上、久しく姉妹とも許し合つた親しい親しい友達からだしぬけに、あなたのやうな女を姉様と尊敬したかと思ふと口惜しい、もうもう大嫌ひ、大嫌ひですと云つた調子で絶交状をよせられては、心から情けなく、折柄雨は毎日毎日降り續いて

宛ら世の終りのやうに、物思ひの夜半を蟲の音は愈々悲しくなり増るので、わびしくて、文學者の不徳義と云つたやうな事が無暗と考へられて、作者を怨めしく身をもだえて泣きました、ですけれ共考へて見ますと、藝術ですもの、仕方がないではありませんか、藝術家としての花袋先生の態度はむしろ當然の事で、而も種々の情實を全然退けて専ら藝術のためにあつくしなさらうと云ふ其尊い御心、實に尊敬すべきではありますまいか殊に其作のすぐれて高く優に明治文壇の傑作たるに於てをやです、私は其尊い御心をはるかに思ひやつて、人情だから仕方が無いとは云へ、たとひ一時にもしろ、世間のみえとか何とか其様なくならない事のために、不平に思ひ御怨み申したのが恥しいやら、勿體無いやら、崇拜の度は以前にも増して、これ程のかたから、曾ては親しく御教へ蒙つた事もあつたかと、其御靴のひもを解き參らすにも足らぬ身を顧みて、恐れ多くも、誇らしうも思ふので。

ですから『蒲團』を讀んだ親友の誰彼が、花袋先生を不徳義呼はりして、何ぼ何でも餘り酷い、僕はこれについての感想文を此次の某青年雑誌に載せるの、イヤ僕は『蒲團』の事實と云ふのを十月の某誌に書く決心のと云つて、大々の憤慨の手紙をよこして慰めて呉れましても、却て迷惑なやうな氣がして、それは私の本意でないから何卒廢して呉れるやうにと、早速斷つてやりましたけれ共、皆な青年の事で氣が早い、もう原稿を送つた後で今更取戻すと云ふやうな、そんな我儘な事は大家と違つて、名も無い我々後進には誠に覺束ない仕事ゆゑ、どうぞ堪忍して不承して呉れとの返事、困つた事だ

とは思ひましたが、まだそれだけなら私黙つても居ませうけれども、何うにも斯うにも黙つて居られぬ事が御座いますので、驚くてはありませんか、中には、時雄が芳子に對する情緒、それを直ぐ事實と見なし、時雄は即ち作者自身で、「蒲團」は實に花袋先生の大膽なる表白である等と云つて居る人もあります相で、馬鹿々々しい、そんな事があつて堪るものですか花袋先生こそ好い御迷惑、若しかして左様云つた風な事を何かの雑誌に書かれようものなら、私先生に對して如何申譯が御座いませう?!

今更私風情の申上げる迄も御座いません、花袋先生は聞えた真面目な正しい方で、斯う申しては失禮ですけれども、今の文壇にはまれに見る御人格です。これだけを如何しても辨解しませんでしたと存じまして、斯う書き續けて參りました。